ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 10, 2002, No.13

役員名簿（2002-2004）

◎代表
山里勝己（琉球大学）
◎副代表
高田賢一（青山学院大学）
生田省悟（金沢大学）
◎事務局幹事
高橋勤（九州大学）
喜納育江（琉球大学）
◎会計
小谷一明（新潟女子短期大学）
近江満里子（東京工科大学・非）
◎監事
西村頼男（阪南大学）
◎ニューズレター編集委員
上岡克己（高知大学）
結城正美（豊橋技術科学大学）
山城新（琉球大学・非）
◎会誌編集委員
村上清敏（金沢大学）
伊藤詔子（広島大学）
石幡直樹（東北大学）
木下卓（愛媛大学）
Bruce Allen（順天堂大学）
◎運営委員
【コンピュータセンター】
山城新
岩政伸治（白百合女子大学）
【大会運営】
赤嶺玲子（富士短期大学）
大神田丈二（山梨学院大学）
小田友弥（山形大学）
関口敬二（大阪府立大学）
巽孝之（慶応義塾大学）
中村邦生（大東文化大学）
横田由理（広島中央女子短期大学）
吉崎邦子（福岡女子大学）
吉田美津（松山大学）
【研究助成】
稲本正（オークヴィレッジ）
岡島成行（日本環境教育フォーラム）
野田研一（立教大学）

第８回全国大会報告

大会運営委員　生田省悟（金沢大学）

晴天に恵まれた10月12日（土）午後、ASLE-Japan／文学・環境学会第９回総会および第８回全国大会が会員約50名の出席のもと、明治学院大学で開催されました。その様子についてご報告します。

木下卓氏の司会による総会では、ほぼ例年どおりの各報告事項が承認されたのちに協議へと移りました。その場では2002年度予算案、次期役員人事などの事項が協議され、とどこおりなく承認が得られましたが、特筆すべきなのは、山里代表によってASLE 国際シンポジウムの計画の概要が明らかにされたことでしょう。つまり、すでにお手許に最新会員名簿とともに届けられた計画書にもあるとおり、2003年3月4日から7日にかけて、琉球大学で "Nature: Urban, Rural, Wild" をテーマとする国際シンポジウムが開催されるというものです。本件も満場一致で承認されたのはいうまでもありません。代表のことばにもありましたように、ASLE-Japan／文学・環境学会の創設以来、10周年という節目を迎える時期に国際シンポジウムが計画されるというのは意義深いことです。会員の皆様の積極的な参加をお願いします。

総会に引き続いて開催された全国大会では、まず三名の方に日頃の研鑽を踏まえた研究発表をお願いしました。要旨についてはご本人がそれぞれにお書きになられた報告に譲りますが、加藤宏氏「サリンジャーと自然－ 作家と作品を探る」は、評価の定まったとみなされがちな書き手の作品を「自然」から読み直し、再検討を行なう必要性を提起されました（司会　佐藤アヤ子氏）。大川重郎氏「環境思想と宗教・霊性の政治学」は、ニューエイジ・ムーヴメントとディープエコロジーの多面的な関連について、種々の文献・資料を踏まえて報告されました（司会　生田）。浅井千晶氏「Carson の自然観の展開－ 海をめぐる三部作から *Silent Spring* へ」は、カーソンの精神的な歩みを丹念にたどるとともに、彼女の著作を環境教育に結びつける意味についても言及されました（司会　上岡克己氏）。三氏の発表が真摯でしかも意欲にみちていたものであったことは、それぞれについて繰り返された活発な質疑応答がおのずと物語っているはずです。また、今回の研究発表を通じて、会員諸氏の関心の広がりと深まりの一端がか

いまみられたことに感慨を覚えたむきも多かったのではないでしょうか。

シンポジウム「アニミズムと文学」は予定時間から大幅に遅れてはじまりました。まず、司会の高橋勤氏がご自身の想いを交えつつ、山尾三省と石牟礼道子に言及することで、アニミズムを「自然と人間の関係をめぐる文化的なパラダイムの問題」として捉える意義を強調されました。次に高橋昌子氏がアニミズムの定義づけを試みられるとともに、泉鏡花におけるアニミズムの要素について作品に即した形で論じられました。さらに岩井洋氏は日本的な自然観の底流にあるアニミズムについて、本覚思想などを軸として考察されました。喜納育江氏はネイティヴ・アメリカンの口承文学におけるアニミズムと「ことば」にこめられた生命力について語られました。詳細はやはり各講師の報告に委ねますが、相異なる視座から披露されたそれぞれのお話は一点に収斂してゆくと同時に、本シンポジウムのテーマがいかに重要な問題であるかを私たちに明確に示してくれました。残念であったのは、時間的な制約から、予定されていた高橋勤氏の石牟礼道子論が割愛されたこと、そして質疑応答が十分に行なわれなかったことです（この点は運営上の不手際をお詫びしなければなりません）。しかしながら、短いながらも実り豊かで印象深いシンポジウムではありました。

全国大会終了後は、目黒駅前の「和民」へと場所を替えて懇親会。盛りだくさんの料理と飲み放題のアルコールその他を楽しみながらのひととき、研究発表やシンポジウムでは語り尽くせなかった事柄をはじめ、にぎやかな話題があちらこちらで飛び交ううちに時間は過ぎてゆきました。家路につく人、二次会に向かう人、34名の参加者は再会を期しつつ、充実した一日を終えたのでした。

今回はアメリカ文学会の日程との関係で一日のみの開催とせざるをえず、恒例の講演とエクスカーションは残念ながら取り止めとさせていただきました。この点、ご不満の方もおられたかと思います。また、危惧していたことではありますが、過密スケジュールのため、皆さまに多大なご迷惑をおかけしてしまいました。重ねてお詫び申し上げます。

会場の明治学院キャンパスでは歴史を偲ばせる瀟洒な建物群が緑に囲まれていて、独特の雰囲気を醸し出していました。全国大会を都心の、こうした麗しい場所で開催できたのは嬉しいこととしか言いようがありません。末尾ながら、会場の提供、準備、懇親会の手配等々でご尽力いただいた笹田直人氏に厚くお礼申し上げます。また、準備に奔走していただいた岩政伸治氏、近江真理子氏、林直生氏、村上清敏氏に感謝いたします。

研究発表要旨

サリンジャーと自然－ 作品と作家を探る

加藤宏（青山学院大学・非）

J. D. サリンジャー（1919-）はニューヨークに生まれ育ち、主に都会の中産階級の日常生活を題材にした短編を、雑誌『ニューヨーカー』を中心に発表した。長編『ライ麦畑でつかまえて』も、ホールデンのニューヨークでの彷徨が話の中心である。しかし、サリンジャーは都会生活の矛盾や、都会に住む人の悩みだけを題材にしたわけではない。作品中には自然に関することがしばしば述べられる。ホールデンは、自然がそのままの形で変わることなく保存されている自然誌博物館が気に入っている。また、都会を離れ田舎で暮らす夢を何度も語る。さらに、ニューヨークに住むグラス家の物語も、「シーモア・序章」においては、サリンジャーの分身ともいうべき語り手のバディは、カナダ国境に近いところに質素な小屋で生活をしている様子を語る。発表では、サリンジャーの作品中から自然をイメージさせることを取り上げ、作家や登場人物たちの自然に対する態度を考察した。

環境思想と宗教・霊性の政治学

大川重郎（立教大学・院）

生態学的破局を強調する環境思想は、世俗的黙示録主義と呼ばれたり千年王国運動の枠組みで説明される場合もある。その例として過激な直接行動で知られたグループ、アース・ファースト!が挙げられるが、そのメンバーたちは、危機を救う自らの正当性を信じている点で選民意識があると指摘されている。その多くがディープエコロジーを信奉しているといわれる彼らは、その運動にネイティヴ・アメリカンの儀式を取り入れてもいる。環境運動が宗教儀式を借用することには、本来の宗教伝統を破壊する、オリエンタリズムであるという否定的見方と、宗教は元来混合的なものである、借用する環境主義者は現実に、概してその異文化に敬意を持っているという肯定的見方がある。

借用者はそれにより環境意識を高められるかもしれないが、人類学者からは、土着の人々の文化や世界理解の方法自体は必ずしも環境にやさしいものではないとの指摘もなされている。

Carsonの自然観の展開—海をめぐる三部作から *Silent Spring* へ

浅井千晶（金蘭短期大学）

Rachel Carson(1907-1964)の作品にみられる自然表象のレトリックについて、先行研究を踏まえて分析した。Carsonの著作では、*The Sense of Wonder* のように生命の営みを愛で、自然礼賛を主とする作品においても現状への警告が文面に潜み、逆に農薬の惨禍を告発し現状を批判する *Silent Spring* においても、随所に自然の美しさが描写されている。この二つの作品は相補的であり、自然表象の可変領域をよく示している。また、Carsonは生命の循環を作品中で繰り返し表明しており、彼女の自然観は生命の連続性にたいする祈念を背景にもつ。Carsonの場合、海に関する初期の著作から *The Sense of Wonder* を経て *Silent Spring* まですべての作品において顕著に表れているのは緻密な観察者の目であり、生命の営みを科学者の視座からみる姿勢は最後まで一貫していた。

シンポジウム「アニミズムと文学」要旨

司会・講師：高橋勤（九州大学）

このシンポジウムでは、アニミズム的な思考と文学とのかかわりを、とくに日本文学を中心として考察した。シンポジウムにおいて確認されたことは、日本文化の基層に神話的思考が横たわり、そこにアニミズム的な思想が色濃く現れていること、近代化の歴史においてそうした思考が抑圧され、逆に、現代の文化の閉塞的な状況を生み出しているということである。昨年亡くなった屋久島の詩人山尾三省に『アニミズムという希望』という著作があるが、この詩人がアニミズムに託した希望とは、人間が自然と精神的なつながり、あるいは交流を回復することによって、環境破壊という社会問題も含め、新たな思考のパラダイムを切り開けるのではないかということだろう。

泉鏡花『高野聖』を通して考える

高橋昌子（三重大学）

泉鏡花『高野聖』は日本近代文学の中でもアニミズム的な認識の強い作品である。この作品に登場する山の女は、民話や神話の「山の神」や「山姥」などアニミスティックな認識が作り上げる自然神の変種だといえるが、ここでの女は伝統的な山姥のような生産力や豊かさを持っていない。生産や農耕という物質次元での自然への関わりを失った状態で、自然を倫理化する認識がじつは自然存在をゆがめ、自然を殺してゆくのではないか、という逆説を『高野聖』の女神の衰弱から読みとり、現代の自然認識の問題を再考する契機とした。アニミズムは近代の科学的な自然認識への批評的要素をもっているとして評価もされるが、また、オカルティズムなどとも通底する危うさを持つとも言われる。アニミズムは自然を倫理化するという点でディープエコロジーの思想と通ずるところもあり、アニミズムの問題は現代の環境思想の問題にもつながると思われる。

伝統的日本的自然観、アニマ息づく世界 – 日本文学を主たるテキストとして

岩井 洋（酪農学園大学）

日本の伝統的な自然観について、和辻哲郎や日本仏教の本覚思想等を参照しつつ、そのアニミスティックな特質を考察した。日本におけるアニミズム的思想の背景にあるのは、豊かな水と四季の変化という日本的な風土において、万法流転、無常感という思想が発生したこと、仏教の本覚思想より霊肉一元論が生まれたことなどが、主な要因として挙げられる。 さらに、本居宣長のもののあはれや、西行・芭蕉の 自然観に見られるように、自然世界がアニマ化され、人のアニマと自然のアニマとの交流が美意識として敷衍したことである。また、賢治文学の自然世界も、自然物の物質性を超えた自然アニマの交流・交錯の世界であり、日本的伝統的自然観のアニミスティックな特質を示すものである。

ネイティヴアメリカンのことばとアニミズム

喜納育江（琉球大学）

ネイティヴアメリカンにとって自然は無数の霊魂と人間の世界とが交わる場所であり、その森羅万象の生命といかに交感し、繋がるかというところにことばの役割があった。ネイティヴアメリカンの伝説の神々が、自然の事物や動物の身体と人間の身体を具有する姿をしていたのと同様に、そのことばも、人間が、人間の言語を越える自然のことばとの交わりに意味を創造しようとする営みから生まれたと言える。David Abramが指摘するように、それは肉体の感覚を介して生まれる、体験としてのことばであり、また、ネイティヴアメリカンにとっては、魂を伴うがゆえに概念世界を

も変容させるmagicとしてのことばだった。現代のネイティヴアメリカンの書き手が英語という新しい言語環境の中で目指すのも、森羅万象の声に耳を傾けることによってのみ生まれる、このような言霊の復興、そしてアニミスティックな想像力と表現の構築であると考えられる

ことばのリアリティー 石牟礼道子の文学と風土

高橋　勤

作家としての原点となった『苦海浄土』以来、石牟礼道子が追い求めたテーマは、「風土の魂」をいかに文学的に表現するかということであった。それは、「死霊や生霊の言葉」を語り、「アニミズムとプレアニミズムを調合」して「近代の呪術師」とならん、という『苦海浄土』における作者自身の言葉からも窺い知ることができる。この発表のねらいは、石牟礼道子の言語観について、宮沢賢治の「鹿踊りのはじまり」と「クンねずみ」を参照しつつ、風土の中から生まれ、自然の原質を保ったことばと、日本の近代を形成し、その近代によって造られた、無色透明な言語とを対比し、言語がいかに権力と結びついたかを考察することであった。また、近代の言語の「残虐性」あるいはその無色透明性を通して、石牟礼が「死霊や生霊の言葉」(つまり言霊)の中に求めたアニミズム的な思想と、言語の詩的リアリティを考察する予定であった。

特集ーアジアの環境作家

近隣アジア諸国のネイチャーライティング・環境文学の動向を学び、文学と環境の分野におけるアジアからの貢献を目指すこと。これは、3月に沖縄で開催予定のASLE国際シンポジウムの大きな特徴のひとつです。そこで今回、「アジアの環境作家」をめぐる小特集を組むことにし、韓国、インド、台湾の作家・詩人について原稿をお寄せいただきました。

Ko Un, the Korean Poet

Dooho Shin
Samchok National University, Korea

"Ko Un is a magnificent poet, combination of Buddhist cognoscente, passionate political libertarian, and naturalist historian." -- Allen Ginsberg.

One of the Korea's foremost and celebrated living poet, Ko Un is the living proof of the tumultuous modern Korean history and his poems record such personal and national history. Born in 1933, he grew up during the Japanese Occupation, and when the Korean War broke out he was conscripted by the People's Army. In his sensitive late teens during the war he observed so much death around him and frequently ran off from his home. In his habitual wanderings he met a Buddhist monk, became a monk himself, and lived a monastic. Before he left the Buddhist community he practiced Zen meditation for ten years, traveling throughout the country. It was also during this time that his prolific writing life started. The war left him mentally devastated, and writing poems became his only life and hope. His first poems were published in 1958. After breaking with the Buddhist community in 1963, he devoted himself to literature while he still led a self-tormenting and nihilist life.

韓国の詩人、高銀

「高銀（Ko Un）は明達な仏教徒、熱心な政治的自由尊重主義者、ナチュラリスト・ヒストリアンとしての側面を兼ね備えた、偉大な詩人である。」——アレン・ギンズバーグ

現代韓国で最も注目され活躍する詩人の一人である高銀は、韓国の動乱時期の生き証人であり、同様に彼の詩は波瀾に満ちた自らの人生と国家の重大な時局を記している。1933年に生まれ、日本植民地時代に育ち、そして朝鮮戦争が勃発した時、人民軍（people's army）に徴兵された。戦時中に多感な十代後期を過ごし、多くの死に直面し、家出を繰り返した。放浪を繰り返すうちに一人の仏僧に出逢い、自身も仏徒となり修行を始めた。仏門生活を離れるまでに禅瞑想を十年間実践しながら国中を旅していたが、活発な執筆活動を始めたのもこの頃であった。戦争で精神的に打ちひしがれた彼にとって、詩作は唯一活力を与えるものであり、希望であった。第一作目の詩集は1958年に出版された。1963年に仏教を離れた後、自虐的なニヒリズムに満ちた生活を送る一方で、文学に没頭していった。

During the 1970s and 1980s he actively participated in the human rights movements against South Korea's military dictatorship. Being a leading dissident spokesman in the struggle against dictatorial regime, he was jailed several times. Democracy and human rights naturally became the major subjects of his writings during this period, and *Flowers of a Moment* and *Ten Thousand Lives* are the representative literary products of this time. Closely related with human rights is environmental problems he has been especially concerned about. In the wake of industralization of South Korea, environmental pollution and destruction have become a prominent social issue, and Ko Un as well as other important environmental writers in Korea have highlighted this problem and criticized growth-led government policy, which eventually led to the criticism of dictatorship and consumption-oriented civilization in general. *My Evening* (1988) is a good example of this trend.

As an active participant in the tumultuous events of Korea's modern history, Ko Un demonstrated his shifted interest after his country succeeded in establishing a democratic government in the late 1980s: reunification of South-North Koreas. He visited with his former jail-mate, President Kim Dae-jung, to North Korea as part of the Korean Reunification Summit. In the poem collection, *The South and the North* (2000), he not only depicts the unique nature and culture of South and North Korea, but he sings full of passion and longing for reunification of two Koreas. In that spirit he leads the Federation of Writers for National Literature.

So far he has written over 100 volumes of books in diverse genres such as poetry, short stories, fiction, essays, and criticism, and some of his works have been translated into several languages, including two volumes published in English, *The Sound of My Waves: Selected Poems of Ko Un* (1993) and *Beyond Self: 108 Korean Zen Poems* (1997).

Now his current and future plans are to expose Korea's artistic and cultural achievements to the rest of the world as he stated in a recent interview.

1970年代から80年代、高銀は、韓国軍部の独裁政治に反対しながら、人権運動に活発に関わった。この時期、 韓国の独裁政治に反対する反抗勢力の指導者として何度も投獄された。民主主義と人権は自ずと彼の作品の中心的なテーマとなった。代表的な作品に『時点の花』(*Flowers of a Moment*) や『よろずの生』(*Ten Thousand Lives*) がある。彼が現在に至るまでずっと関心を寄せている環境問題も、人権問題と深い関わりをもつ。韓国の産業化の波の中で、環境汚染と自然破壊は大きな社会問題であった。高銀を含めた重要な環境作家達は環境問題を積極的に取り上げ経済成長重視の政策を批判し、その批判は更に独裁主義と消費中心の文明へと向けられていった。『私の夜』(*My Evening*,1988)にはそのような特徴がよくうかがえる。

1980年代後半の民主政治確立の成功の後、現代韓国の動乱の時局へ積極的に関わっていく者として、高銀の関心は一つの方向転換をし、南北朝鮮統一へと向けられる。かつての監獄仲間であった現大統領 Kim Dae-jung と南北再統合サミット参加のために北朝鮮を訪問した。『南と北』(*The South and the North*, 2000)には南北朝鮮の独特な自然と文化が描かれているだけでなく、二つの朝鮮統一への情熱と希望がうたわれている。その精神で高銀は国民文芸家連合(Federation of Writers for National Literature)の先導的役割を担っている。

今までに彼は詩、短編・長編小説、エッセイ、批評を含めた多岐のジャンルにわたって百冊以上出版し、その中のいくつか—『私の波の音：高銀詩選』(*The Sound of My Waves: Selected Poems of Ko Un*, 1993) 『己を超えて：韓国禅詩』(*Beyond Self: 108 Korean Zen Poems*, 1997)は英訳されている。最近のインタビューよると、現在の彼の計画は韓国の芸術的、文化的な業績を世界に伝えることである。(訳　山城新)

Arundati Roy and the Real Costs of Living

Bruce Allen （順天堂大学）

Arundati Roy と生きることの真の代価について

"In the country that she came from, poised forever between the terror of war and the horror of peace, Worse Things kept happening."

"So Small God laughed a hollow laugh, and skipped away cheerfully. Like a rich boy in shorts. He whistled, kicked stones. The source of his brittle elation was the relative smallness of his misfortune. He climbed into people's eyes and became an exasperating expression."

The country is the Kerala region of southern India. The woman, a leading character in Arundati Roy's 1997 Booker Prize-winning first novel, *The God of Small Things*. The elements are misfortune, mystery, passion, elation, and an almost impossible yet irrepressible presence of hope.

Linguistically and stylistically innovative, and complex in its storytelling, *The God of Small Things* probes through multiple layers of time, persona, culture, dream, and reality. Roy's writing is likely to remind many readers of the magically complex worlds of Gabriel Garcia Marquez and Salmam Rushdie. Or of the tenacious explorations of the interrelations between race, class, sex, and family found in the writing of William Faulkner. Or of the multi-layered interweavings of myth, story, dream and reality in novels of Ishimure Michiko. Suffusing Roy's urban-based story is a rank and rampant presence of wildness. Creeping its way through the cracks in the pavement, as through the pores, nerves, and cells of the human body, this wild presence enmeshes people, passions and places in a dense, sensuous, jungle-like atmosphere. It is a world where, as Roy describes it, "the sky was orange, and the coconut trees were sea anemones waving their tentacles, hoping to trap and eat an unsuspecting cloud." *The God* is a tale of intrigue, mystery and passion; of unsparing observation of society and character; all recounted in a poetic style that courageously exposes the possibilities and the pitfalls of the human spirit.

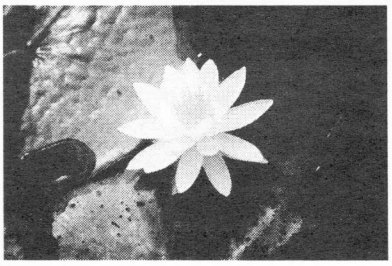
Having first read Roy's complex novel, I was somewhat surprised when I found her second book, a nonfiction work titled *The Cost of Living*. The stark themes of its two essays are nuclear bombs and dam construction. In contrast to the dense, elliptical writing style of Roy's novel, the prose here is straight-to-the point logical, and clear as light. Her essay "The End of Imagination" was occasioned by the testing of nuclear weapons by India and Pakistan in 1998. Roy's passionate writing is steeped in a deeply ecological understanding and concern. She warns, yet also encourages us:

> If there is a nuclear war, our foes will not be China or America or even each other. Our foe will be the Earth herself. The very elements—the sky, the land, the wind and water—will all turn against us. Their wrath will be terrible. . . . There is beauty yet in this brutal, damaged world of ours. Hidden, fierce, immense. Beauty that is uniquely ours and beauty that we have received with grace from others, enhanced, re-invented and made our own. We have to seek it out, nurture it, love it.

The companion essay, ironically titled "The Greater Common Good," is based on Roy's investigative reporting on the construction of a

『ささやかな物たちの神』(*The God of Small Things*)は 1997 年のブッカー賞受賞作家 Arundati Roy の最初の小説である。言語的にまた文体からしても斬新な作品であり、その語り口は複雑に絡み合っている。

この作品は多層な時間、文化、夢そして現実を探究している。彼女の作品を読むと、多くの読者はガブリエル・ガルシア＝マルケスやサルマン・ラシュディが描き出す不思議に入り組んだ架空の世界を思い起こすであろう。あるいは、ウィリアム・フォークナーの作品に見られる民族、階級、性、家族の相互関係をめぐる確乎たる探究、または、石牟礼道子の小説に描かれる何層にも織りあわされた神話、夢、現実が想起されるかもしれない。都会を中心に繰り広げられる Roy の物語に見られるのは、繁茂する野生の存在である。この野生の存在は、舗装道路の割れ目から這い上がり、人間の毛穴、神経、細胞を通りぬけ、人、感情、そして場所を濃密かつ感覚的なジャングルのような環境へと搦めとってゆく。



最初に読んだのが Roy の複雑な小説だったので、次作のノンフィクション『生きることの代価』(*The Cost of Living*)を読んだときにはいささか驚いた。この作品に収録されている二つのエッセイのテーマは核爆弾とダム建設である。濃密で省略が多くわかりにくい小説の手法とは対照的に、Roy のノンフィクションは論理的に要点をつかみ、大変明らかである。所収エッセイ「想像力の終焉」("The End of Imagination")は、1998 年にインドとパキスタンで行われた核実験を受けたものである。Roy は「核戦争が起きるならば、我々の敵は中国でもアメリカでも誰でもない。我々の敵は地球になるであろう。つまり、四大元素—空、土地、風、水—そのものが我々に向かってくるであろう」と綴る。

もうひとつのエッセイ「さらなる公益」("The Greater Common Good")は、インドのナラマダ川に建設中の超巨大ダムに焦点をあてている。これ

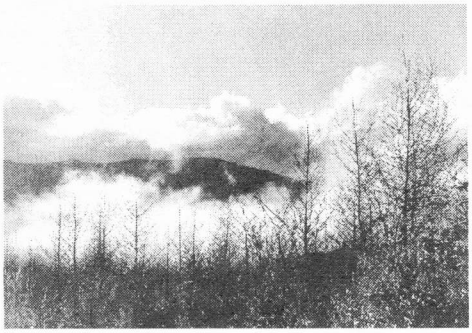
"megadam"—the Sardar Sarovar—on the Naramada River in central India. This is but the largest of some 3,200 dams being planned for this single river. For this one dam alone, more than 10,000 people and a vast ecosystem face "submergence". Roy writes, "The story of the Naramada Valley is nothing less than the story of Modern India." We might add that this is the story of much of the world—and of Japan in particular. Roy goes on to explain the logical, frightening, but normally overlooked link between bombs and dams:

> Day by day, river by river, forest by forest, mountain by mountain, missile by missile, bomb by bomb—almost without knowing it—we are being broken. Big dams are to a nation's "development" what nuclear bombs are to its military arsenal. They're both weapons of mass destruction. . . . They're both malignant indications of a civilization turning upon itself. They represent the severing of the link, not just the link—*the understanding*—between human beings and the planet they live on. They scramble the intelligence that connects eggs to hens, milk to cows, food to forests, water to rivers, air to life, and the earth to human existence.

Discovering the mixture of fiction, investigative reporting, and activism in Roy's works should not have been surprising. She writes in the company of other writer-activists such as Terry Tempest Williams, Linda Hogan, Rick Bass, David James Duncan, Wendell Berry, and Rachel Carson. And, notably, that of Ishimure Michiko—for especially in Ishimure's *Tenko*(*Lake of Heaven*), we find a novelistic expression of the spiritual, cultural, and environmental "costs of living" incurred by the building of the very sort of unwarranted dams that Roy writes of. Roy's investigative writing is also in the spirit of Ishimure's writing and activism on behalf of the people of Minamata.

In Roy's latest book, *Power Politics*, she further develops her exploration of the damages caused by dams and goes on to tackle the problems caused by globalization. Recently Roy's activism against dams and in behalf of the displaced peoples earned her a contempt of court citation from India's Supreme Court. In a third essay, "On the Writer's Freedom of Imagination," Roy discusses the role of author-activists. The similar concerns and commitments among such writer-activists should not surprise us. Rather, they should help us to better understand the true costs of living and to bridge the gap that often exists between literature and our lives.

はこの川に計画されている約 3200 のダムの中でも最も大きなものである。この一つのダムのために 1 万人以上の人々と広漠とした生態系が水底に沈むことになる。Roy は「ナラマダ峡の話はつまりは現代インドの話なのです」と語る。これは世界全体の話であり、特に日本の話でもあるとも言える。Roy は生態学的見地から「大きなダムが国の『発展』に意味するものは核兵器が軍事備蓄に意味するものと同様である。それらは共に大量破壊兵器である。それらは共に文明自身に向けられた危険な徴候である。それらは卵と鶏、ミルクと牛、食物と森、水と川、空気と命、そして地球と人の存在を結びつける知性を混乱させる」と語る。



Roy はテリー・テンペスト・ウィリアムス、リック・バス、ウェンデル・ベリー、レイチェル・カーソンといったアクティヴィスト作家と同じ部類に属する。そして特に石牟礼道子とは共通点が多い。なぜなら石牟礼の『天湖』は Roy が書いているようなダム建設によってこうむった生きることの霊的、文化的、環境的代価（犠牲）に小説的な表現を与えているからだ。

Roy の最新作である『パワーポリティクス』(*Power Politics*)は、ダムによって引き起こされた損害をさらに検討し、グローバリゼーションの問題に取り組んでいる。最近彼女はダムについての活動のためインドの最高裁判所から法廷侮辱行為という罪を科せられた。「作家の想像力の自由について」("On the Writer's Freedom of Imagination") と題されたエッセイの中で、Roy はアクティヴィスト作家の役割について述べている。Arundati Roy の作品は必然的に物議をかもすと同時に根本的に人々に活気を与えるものである。（訳　ブルース・アレン）

Nature Writing in Taiwan

台湾のネイチャーライティング

Hwoung-chang Liou
Chinese Military Academy, Taiwan

Through a serious earthquake in 1999, people in Taiwan experienced a natural catastrophe and began to reevaluate their relationship with nature. An ecological consciousness has been awakened. Serious mudslides that destroyed the mountainous region after the earthquake seemed to accelerate the losing of Formosa, "a beautiful island in a graceful ocean." Chen Yu-feng is an outstanding eco-fiction writer who is also a biologist married to a photographer. They worked together on a historical book called: *The 921 Earthquake and Land Ethics*. The book impresses readers with its pictures and insightful ideas that echo Aldo Leopold's *A Sand County Almanac*. Most of the academic reports focus on how to resurrect a community out of the debris of broken gardens. Other nonfiction nature writings try to evoke people's vague sense that environmental problems exist. As mentioned repeatedly in Chieh-mu Lee's *Blue Sky /Green Water /Pure Land* and *Give Me Back Nature*, nature writers concentrate on the presentation of contemporary ecological problems by comparing them with the past memories.

Lin Chun-yi warns in his *The Red Light of Nature, When Can the Pollution of Taiwan be Stopped*, *The Problems of Pollution in Taiwan* that Formosa is no longer a beautiful island after serious pollution. In response to the fast disappearance of some species in Taiwan, books like *A Vigilant Fish* by Hung Shu-li focus on the collections of the special species that are still seen on the island but might disappear for good. *Guide to Nature; Taiwan's Mangrove* by Kou Chi-young records the resurrection of the wetland inhabited by mangrove and waterfowl. Su Ren-hsiu is a photographer who has recorded the Taroko Gorge National Park with his lens. His brochure provides beautiful pictures with stories of his adventure in the national park. Hsu recounts his journey using the cyclic orders of seasons with the myth of each season. Beautiful pictures and evocative narratives of Hsu's brochure help readers understand nature better.

Lamentation for the fast disappearing nature also appears in some poems. Kevin Sun in *The Tower of Babel* shows his keen reaction to the changing environment. "An Elegy for the Maple Tree" mourns the maple that saw schoolboys and girls going to school, listened to the steps of senior walkers, and reflected images in the poet's window. One day, the tree was cut down. The poet accuses a woodchopper of dismembering the tree that symbolizes life in nature. In Pai Chia-hua's "The Breath of Trees," the poet treats trees as biological creatures with an intrinsic value. Trees are signifiers of shelters that adopt birds and sooth

1999年の大地震を通して、台湾の人々は深刻な自然災害を経験し、自然との関係を再確認し始めた。 エコロジカルな意識が目覚めたのだ。地震の後山岳地域を襲った大きな土砂崩れによって、ポルトガル語のFormosaが意味した「優雅な海の上の美しい島」としての台湾は加速度的に失われているようだ。Chen Yu-feng は生物学者であると同時に優れたエコフィクション作家である。 写真家のパートナーと二人で発表した歴史書『921大地震と土地の倫理』(*The 921 Earthquake and Land Ethics*)は、写真だけでなくアルド・レオポルドの『野生のうたが聞こえる』(*A Sand County Almanac*)を思わせるような洞察力で読者に感銘を与えた。 多くの学術的な報告の関心はいかに崩壊した楽園の瓦礫の中から共同体を再生させるかという問題に向けられ、ネイチャーライティングは環境問題が存在しているという人々の漠然とした認識を高めることに力を注いでいる。Chieh-mu Lee の『青い空・緑の水・浄土』(*Blue Sky/Green Water/Pure Land*)や『自然をかえせ』(*Give Me Back Nature*)の中で繰り返し述べられているように、ネイチャーライティングは過去の記憶と比較することによって、現代環境問題を明らかにしようとしている。

Lin Chun-yi は『自然の赤信号』(*The Red Light of Nature*)、『台湾の環境汚染が止むときは』(*When Can the Pollution of Taiwan be Stopped*)、や『台湾の汚染問題』(*The Problems of Pollution in Taiwan*)といった著作の中で、深刻な環境汚染の後、もう台湾はかつての「美しい島」ではないと警告している。台湾の動植物種が急激に絶滅しつつある現実を目の前にして、Hung Shu-li の『警戒する魚』は島で依然として目にすることはできるが絶滅の危機にある種について書いている。『自然へのガイド—台湾のマングローブ』(*Guide to Nature; Taiwan's Mangrove*) の中で Kou Chi-young はマングローブと水鳥が生息する湿地帯の再生について記録している。Su Ren-hsiu は太魯閣国立公園(Taroko Gorge National Park)をレンズで追う写真家である。Su のパンフレットは美しい写真と一緒に、彼の国立公園の冒険をめぐる物語、四季の神話とともに語られる彼の旅の記録が添えられている。彼の写真と想像力を喚起するナラティブは読者の自然理解を助けている。

消えゆく自然への悲嘆は詩にもうかがえる。Kevin Sun は『バベルの塔』(*The Tower of Babel*)の中で変わりゆく自然への敏感な反応を見せている。「カエデのためのエレジー 」("An Elegy for the Maple Tree")は、子ども達の学校への登校を見つめ、老人達の足音を聞き、詩人の窓にイメージを写していたカエデへの悲歌である。ある日その木は切り倒され、詩人は自然における生命の象徴であった木を切った木こりを非難する。Pai Chia-hua は 「木々の呼吸」("The Breath of Trees")で、木を本質的な価値を持つ生命体として扱う。木は宿

people with their leaves, twigs, shadows, and fresh air. Mar I-Gong and Han Han's *The Only Earth We Have* is an outstanding eco-fiction. Mar I-Gong has published several collections on the theme of environmental concern. Yang Ming-tu mocks human ignorance in his fable stories: "Whatever Nature is Good," and "The Right Time is Over." Yang aims to disclose the inner world of animals. All birds and animals prefer to enjoy freedom in the wilderness than to be domesticated.

As for the travelogues concerning nature writing, they are mainly nostalgic records about the topology of the past. Trails have seldom retraced and blur like pathless way in the mountainous range. In June 2002, brave mountaineers sponsored by La New, a shoe company, tried to retrace the trails through mountains in Taiwan. Five of the hundreds overcame hardship and fulfill their dream of conquering the mountain. They will have their journal published soon. Historical records about the disappearing trails are: *The Footprints of Ancestors in Taiwan* by Hung Yin-shen, and *Retracing and Investigating Old Trails in Taiwan* by Liu Ke-hsiang. As an island in a graceful ocean, the *Oceanic Taiwan* by Yin Ping provides readers with images of the fertile fishery resources and the specific life style of aquaculture.

As environmental ethics become the focus of worldwide attention, nature writing has also emerged in the last two decades in Taiwan. Although nature writers remain but a small contingent, they are people with vision and insight into relationships between man and nature. They desire to establish an ecocentric rather than an anthropocentric philosophy of life. To establish a balanced and harmonious biotic community, nature writers in Taiwan call for a humble and simple lifestyle.

を意味し、鳥をかくまい、葉、小枝、木陰、新鮮な空気によって、人々を癒す。Mar I-Gong と Han Han の『かけがえのない地球』(*The Only Earth We Have*)はすばらしいエコ・フィクションである。Mar I-Gong は環境への配慮をテーマにしたいくつかの本を出版している。Yang Ming-tu は寓話、「自然なら何でも良い」("Whatever Nature is Good") や「時機は過ぎた」("The Right Time is Over")の中で人間の無知を面白おかしく語る。 Yang は動物の内側世界に迫る。この作家によると全ての鳥や動物達は家畜化されるよりも野生の中で自由を謳歌する方を選ぶのだ。

ネイチャーライティングに関する旅行記について言えば、過去の風景をめぐるノスタルジックなものが多い。山道はめったに人が足を踏み入れることもなくなり、山岳地域の「道なき道」の様相を呈していたが、2002 年の 6 月、シューズ会社 La New がスポンサーにつき、勇敢な登山者達が台湾の山道の再踏破を試みた。何百名の参加者の中から 5 人が困難を乗り越え山を制覇するという夢を実現させた。彼らはその冒険の日誌を近々出版予定である。消えゆく山道についての歴史的叙述は Hung Yin-shen による『台湾の先祖の足跡』(*The Footprints of Ancestors in Taiwan*) や Liu Ke-hsiang の『台湾の古き山道を訪ね歩く』(*Retracing and Investigating Old Trails in Taiwan*) がある。「優雅な海の島国」を顧みながら、Yin Ping の『海洋の国、台湾』は豊かな海洋資源と海文化の独特な生活様式について語っている。

環境倫理が世界的な関心事となり、ネイチャーライティングも台湾において 20 年前から現れてきた。ネイチャーライター達は依然として少数派に留まっているが、彼らは人間と自然との関係を洞察力と識見を持った目で考察する作家達である。彼らは人間中心的というよりも生態中心的な人生観を確立しようとしている。調和のとれた生物共同体を構築するために台湾のネイチャーライター達はシンプルで謙虚な生活を求めている。(訳 山城新)

Bibliography

Chen, Yu-feng. *The 921 Earthquake and Land Ethics*. Taipei: Chein Wei, 2000.

Lee, Chie-mu. *Give Me Back Nature*. Taipei: Chien-wei,1995.

---. *Blue Sky/Green Water /Pure Land*. Taipei: Chien-wei,1995.

Lin, Chun-yi. *The Red Light of Nature*. Taipei:Independence Evening News, 1991.

---.*The Problems of Pollution in Taiwan*. Taipei:Independence Evening News, 1992.

Liu, Ke-hsiang. *Retracing and Investigating Old Trailers in Taiwan*. Taipei: Yu-Shan, 1995.

Hung, Shu-li. *A Vigilant Fish*. Taipei: Morning Star, 1986.

Hung Yin-she. *The Footsteps of Ancestors in Taiwan*. Taipei: Time Culture, 1993.

Kou, Chi-young. *Guide to Nature; Taiwan's Mangrove*. Taipei: Tar-Shu, 1995.

Mar, I-gong. *The Only Earth We Have*. Taipei: Chou-Ger,1983.

Pai, Chia-hua. "The Breath of Trees" in *Selected Poems of 1992*. Taipei: Modern Poetry Quarterly, 1994.

Su, Ren Hsiu. *Natural Steps in Taiwan*. Taipei: Great Earth Geography,1999.

Sun, Wei-min. (Kevein). *The Tower of Babel*. Taipei: Modern Poetry Quarterly, 1991.

Yang, Ming-tu. *Shui Tui Tzu Fables*. Taipei: Bookman, 1996.

Yin-Ping. *Oceanic Taiwan*. Taipei: Commonwealth, 1994.

書誌情報

●稲本正編『森を創る　森と語る』（岩波書店、2002）

会員である稲本氏の新著。各界の賢者（C.W.ニコル、筑紫哲也、今森光彦、永六輔、中村桂子）が語る森についての熱きメッセージを集めたもの。様々な角度から「森」がとりあげられ、「森」がいかに日本人の魂に影響を与えてきたか再認識させられる。なお本書の売り上げの一割が熱帯林の保護と再生にまわされるということである。（上岡）

●岡島成行『自然学校をつくろう』（山と渓谷社、2001）

会員である岡島氏の新著。現在の環境破壊の要因の一つに、人々が自然から乖離していることが指摘されている。自然との接触をとおして私たちが変わらなければ環境は改善されない。現状を打破する試みの一つに、自然学校の取り組みがある。自然学校は環境教育の原点であり、その普及が求められている。具体的な自然学校の取り組みが紹介されており、一度は訪ねてみたいものである。（上岡）

●ソロー、ヘンリー・デイヴィッド／伊藤詔子・城戸光世訳『野生の果実』（松柏社、2002）

ソロー晩年の自然研究がディーン教授によってWild Fruitsとしてまとめられ、その待望の翻訳が本学会員である伊藤氏と城戸氏によって出版された。ネイチャーライティングの原型を創始したソローの、新たな「人間と自然の関係」が解明されることであろう。ソローのエコロジーや環境意識の発展を辿る上で必読書となるのはまちがいない。（上岡）

●西村頼男・喜納育江編著『ネイティヴ・アメリカンの文学』（ミネルヴァ書房、2002）

ネイティヴ・アメリカン文学の背景的考察から現代作家・作品研究にいたるまで、広い領域が14の論考によりカバーされている。ママデイ、シルコウ、アードリックといった有名どころをきっちりと押さえつつ、たとえばチカーノ文学研究の観点を導入してネイティヴ・アメリカン文学を斬ってみせるといったスリリングな論考も含む、意欲的な研究書である。編者および執筆者の半数近くがASLE-Japan会員。（結城）

●日野啓三『落葉　神の小さな庭で』（集英社、2002）

今秋逝去された日野氏の短編集。生／死、現実／幻想、肉体／霊、意識／無意識、光／闇、自己／他者、日常／他界のインターフェイスから発せられることばが、魔術的リアリズムの磁場を形成しつつ、「人間という生物」の強度の肯定を導いている。「種を超える生命的経験」といったネイチャーライティングの主要概念もみられるが、それが「（自然と）気軽に共存共感してはいけない」というスタンスにもとづいている点に、この作家特有の自然観がうかがえる。（結城）

●Anderson, Lorraine and Thomas S. Edwards, eds. *At Home on This Earth; Two Centuries of U.S. Women's Nature Writing,* Hanover: UP of New England, 2002.

編者のひとりLorraine Andersonは、ネイチャーライティングのキャノン形成における男性偏重を指摘し、1991年に女性ネイチャーライティングのアンソロジーを編んでいる。本書は、前作*Sisters of the Earth*と同様、アメリカ合衆国の女性作家の作品に限定してはいるが、時代の枠は幾分拡げられ19世紀前半から現代までをカバー。本書に集められた女性作家の声は、男性中心主義的に構築されてきた＜自然＞をめぐる社会的・文化的コードの再考をうながす契機となるだろう。（結城）

●Dixon, Terrell F., ed. *City Wilds: Essays and Stories about Urban Nature*. Athens: U of Georgia P, 2002.

都市という自然、都市における野生を描いた35篇のエッセイ・物語を収録。ほとんどが90年代以降の作品。これは、自然／都市の二項対立がいかにアメリカ合衆国に伝統的であったかということの裏返しなのだろうか。蛇足ながら、同様のテーマを扱った詩のアンソロジーに、*Urban Nature: Poems about Wildlife in the City* (Ed. Laura-Anne Bosselaar, Minneapolis: Milkweed, 2000)がある。（結城）

●Duncan, David James. *My Story as Told by Water: Confessions, Druidic, Rants, Reflections, Bird-Watchings, Fish-Stalkings, Visions, Songs and Prayers, Refracting Light, from Living Rivers, in the Age of the Industrial Dark.* San Francisco: Sierra Book, 2001.

この作家を説明するときにエドワード・アビー、ノーマン・マクリーン、リチャード・ブローティガン、等の作家を並べてみたらこの作家のイメージもわいてくるはずである。ネイチャーライティングの名作 *The River Why* (1983)を始めとしてユーモアと深淵なる思索とアクティビズムを織り交ぜた文体はしばしば「天才的」と評されることも。因みに本作品は2001年度の全米図書賞のノミネート作品。(山城)

●Gottlieb, Robert. *Environmentalism Unbound: Exploring New Pathways for Change.* Cambridge: MIT Press, 2001.

環境と公正の観点からアメリカ環境史を読み解いた *Forcing the Spring* (1993)の著者による最近の著作。一貫して見られるのは、都市生活に生きる人々の実生活と環境問題の関係を考察し、環境史や環境保護運動をもっと多様で幅広く見ていこうとする立場。(山城)

●Hay, Peter. *Main Currents in Western Environmental Thought.* Sydney: U of South Wales P, 2002.

西洋文化における(といってもこの本の枠組みはもう少し狭いかもしれないが)環境思想をトピック別に概説する。今までこれほど手際よくまとめられた環境思想・運動関連の著作はなかったのでは。入門書、参考書としてクラスで学生に使わせるなり、手元において小事典のように使うなり、いわゆる「使える」本といったところ。エコクリティシズムへの直接的言及はない。(山城)

●Lomborg, Bjorn. *The Skeptical Environmentalist: Measuring the Real State of the World.* Cambridge: Cambridge UP, 2001.

「環境をめぐる諸々の問題は実際には改善傾向にあり、環境保護主義者達が言うようには悪化はしていないし、これからも改善していくだろう。」統計学を専門として、グリーンピースの環境活動家でもあった著者はあらゆる統計情報を再解釈し、環境保護主義者達に疑問を投げかける。500ページに及ぶ本著の大部分はデータの解析と環境保護主義者達への反論に費やされるが、著者は決して反・環境保護を唱えているのではなく、実際の問題の客観的な把握、それに基づいた解決と方法と優先順序に関して論が展開される。環境問題に関わる者として私達は著者の懐疑論にどう応える事ができるでしょうか。本当に環境は改善方向にあるのでしょうか。我々身近な問題と照らし合わせてみるといろいろこの本の問題点が見えてくるかもしれません。(山城)

●Merchant, Carolyn. *The Columbia Guide to American Environmental History*, New York: Columbia UP, 2002.

『自然の死』や『ラディカル・エコロジー』などの著書で知られるマーチャントの新著。アメリカの環境史に関する文献は多いが、本書はその懇切丁寧な解説で読者を魅了する。この分野での定本となろう。200ページにおよぶ資料と書誌は貴重である。(上岡)

●Nash, Roderick Frazier. *Wilderness and the American Mind*, Fourth Edition, New Haven: Yale UP, 2001.

1982年出版の第3版から20年ぶりの名著の新版。あらたにEpilogueとBibliographyが付け加えられただけだが、ナッシュはあらゆる環境汚染のなかでも最大の汚染は心の汚染であると強調する。私たちの価値観や姿勢をただすうえで、現在でもWildernessは貴重なものということを再認識させられる。(上岡)

●Steinberg, Ted. *Down to Earth: Nature's Role in American History.* Oxford: Oxford UP, 2002.

ヨーロッパ移民の与えた生態系への影響、土地と合衆国成立の過程における土地の役割、19世紀後半の消費社会の台頭等を大きなテーマとして、アメリカ史を見ていく。幅広いトピックをお手玉のように自在に操っていく手際のよさで、専門研究者だけでなく、一般や学生にも面白く、読みやすい本。(山城)

事務局より

国際シンポジウムのご案内

2003年3月4日(火)より7日(金)まで、琉球大学において文学・環境学会国際シンポジウムが開催されます。総合テーマは「自然—都市、田園、そして野生」、ゲスト・スピーカーには、ゲーリー・スナイダー氏をはじめ、国内外から著名な作家、研究者をお招き致します。会員の皆様にも奮って御参加いただきたいと思います。招聘講師は以下のとおりです。

ゲーリー・スナイダー（詩人）、ロバート・マイケル・パイル（作家）、高銀（大韓民国、作家）、カーシャン、リウ（台湾、作家）、スコット・スロヴィック（ネヴァダ大学教授）、シェリル・グロットフェルティ（ネヴァダ大学教授）、森崎和江（作家）、加藤幸子（作家）、崎山多美（作家）ほか。

なお、この国際シンポジウムは、2003 年度の全国大会を兼ねることが、総会で決定しております。どうかご了承下さい。

2003 年度スケジュール

3 月 4〜7 日	国際シンポジウム「自然—都市、田園、そして野生」
3 月 20 日	『文学と環境』第 6 号投稿締切
4 月下旬	Newsletter No. １４発行予定
5 月下旬	2003 年度役員会
9 月下旬	『文学と環境』第 6 号刊行

入会・変更・退会窓口

ASLE-Japan／文学・環境学会事務局幹事
〒903-0213　沖縄県西原町千原 1 番地
琉球大学法文学部　喜納育江研究室内
Tel & Fax: 098-895-8291　E-mail: ikuekina@ll.u-ryukyu.ac.jp

※　今年度の会費をお支払いになっていない方は、お早めにお願いします。

郵便振替　口座番号：01380-1-56784
加入者名：ASLE-Japan（文学・環境学会）

その他

ASLE-Japan コンピュータ委員（岩政／山城）ではホームページに関する御意見、御要望、掲載希望の情報等を募集しております。何かございましたらいつでもコンピュータ委員まで御一報下さい。

ホームページ URL：<http://www.scs.unr.edu/~shiny/>
連絡先：　岩政　伸治<iwamasa@shirayuri.ac.jp>、山城　新<shiny@unr.nevada.edu>

ニューズレターへ原稿をおよせください！

エッセイ、学会報告、授業のシラバス等、ニューズレターへの原稿をお待ちしています。なお、電子メールでのご投稿の際には、念のためニューズレター編集委員全員宛(kamioka@cc.kochi-u.ac.jp, yamashiroshin@yahoo.co.jp, yuki@hse.tut.ac.jp)にお送りください。

編集後記

新編集委員による最初の号をお届けします。なれない作業に戸惑い、予定より少し遅れてしまいましたが、強力な若手編集委員と会員の協力をえて、何とか年内発行にこぎつけました。特集を含め、多くの情報を提供できたことで、ニューズレターとしての格好はついたかなと思っています。ニューズレターへの投稿は随時承っています。編集委員までお寄せください。では３月に沖縄でお会いしましょう。(K)

ASLE-Japan／
文学・環境学会
Newsletter No.13

【発行】
ASLE-Japan／文学・環境学会
事務局：琉球大学　法文学部
山里勝己研究室内
〒903-0213 沖縄県西原町千原 1 番地
Tel & Fax: 098-895-8295
E-mail: yamazato@ll.u-ryulyu.ac.jp

【編集】
編集委員長　上岡克己
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1
高知大学人文学部
E-mail: kamioka@cc.kochi-u.ac.jp